

藤並の森

vol.99
2022.11

昭和28年5月聖ヨハネ会桜町病院の会堂前の上林暁



上林暁の妻繁子と2人の子どもたち

リレー随筆
私小説の生き方 上林暁に寄せて

富岡幸一郎

日本の近代文学には、私小説と呼ばれるジャンルが伝統的にあります。作家自身の「私」を中心にして、周囲の人々やその生活を描く作風ですが、その時に「私」の主觀や感性を絶対化することで、エゴイズムと、現実をありのままに描くリアリズムを取り違えていたとの批判があり、しばしばなされてきました。

その代表例は文芸評論家の中村光夫の『風俗小説論』(昭和二十五年)です。フローベールなどの西洋小説の専門家であった中村の批判は、私小説が社会的な広い視野を欠き個人の狭い世界にとじこもり、近代日本文学のリアリズムに歪みと偏りをもたらしたという厳しいものでした。志賀直哉などに代表される私小説は、文学理論的には、ここで息の根が止つた感があります。世界や人間の様々な現実を描くことはできない。

しかし、実はその後も少なからぬ作家たちによって私小説は書き継がれ、それは現代に至っています。上林暁の文学も、この私小説の系譜にあると言えますが、昭和七年に発表した「薔薇盜人」に

ついて、川端康成が「生活を見る眼の誠実の手柄」と評したように、その作家の「眼」は描くべき人間を深く包み込む優しさにおいて極まっています。決して作家自身の「私」を絶対化していない。むしろ、その作品世界は、ついに他者を許容することで、描くべき存在に自然をはじめとする森羅万象を受け容ることで、生命の息吹を注入し活力を回復させるのです。

代表作『聖ヨハネ病院にて』(昭和二十一年)は、妻の闘病生活に材をえた小説ですが、そこには自分のエゴに直面しながら、他者とともに生きることの真実の優しさが神々しい夫婦愛として描き出されます。上林文学は、肉親や知人、自らの故郷を描きつづけ、そのことで人間のあるべき生き方に深い示唆を与えています。日本社会が息苦しい困難に直面し、世界が戦争や混乱に揺れている今日、その生涯を私小説一筋に生きた上林暁の作品は、私たちに小さいながらも力強い、勇気と安心をもたらしてくれるでしょう。

企画展

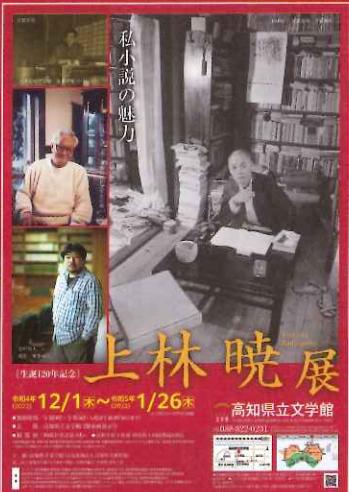
生誕120年記念

「上林 晓展」への誘い

令和4年
(2022) 12/1木～ 令和5年
(2023) 1/26木

※12月27日～1月1日(休館)

Akatsuki
Kanbayashi



上林曉生誕120年を記念し
ての展覧会。

本展では、高知出身の私小説作家
上林曉の人と文学を中心に紹
介します。

さらに、大江文学の研究者であ
る東京大学大学院総合文化研究
科准教授 村上克尚氏のご協力

を経て、作中「一人称」を用いなが
らも私小説に対しても、上林とは
違った見解を持つ大江健三郎に目
を向けるとともに、森鷗外、志賀
直哉、川端康成、太宰治、田中英光、
安岡章太郎といった著名な作家

の作品や、「苦役列車」で芥川賞を
受賞し、令和4年2月に亡くなつ
た私小説作家西村賢太の作品を
通して、私小説の変遷や作品の魅
力

力を紹介します。

上林曉、明治35(1902)年10
月6日、高知県幡多郡田ノ口村
(現黒潮町)生まれ。父親の伊太郎
は、長年教師や村長を務め、俳句
や囲碁を嗜む知識人でした。

曉は、父からの影響を受け、小
学3、4年生の頃から俳句に親し
み、中学・高校時代は、同人誌に投
稿、編集にも携わりました。東京
帝國大学文学部英文科卒業後、改
造社の記者を経て、執筆活動に専
念。改造社時代からのペンネーム
上林曉は、熊本五高時代の下宿先
であった熊本市上林町に由来し
ています。

昭和7(1932)年、「薔薇盜
人」が川端康成に激賞され文壇に
登場、注目を浴びます。

その後の『安住の家』で私小説に
活路を拓き、妻繁子の発病から死
に至るまでの日々を描いた『聖ヨ
ハネ病院にて』など病妻ものとい
われる作品群で、私小説作家とし
て、高い評価を得ます。

当館には、上林が左手で書いた
「芥川龍之介の思ひ出」をはじめ、
上林曉展に向けて、ご遺族から寄
贈された草稿の数々を所蔵して
おり、初公開資料を多数展示しま
すので、是非、ご覧いただきたい
と思います。

(学芸課長／津田加須子)



『晩春日記』上林 晓著 櫻井書店刊

しかし、昭和37(1962)年、最初
の脳溢血から10年目の大病は、曉
から右手と足と口の自由を奪いま
した。病氣に屈することなく、口
述筆記で書いた「白い屋形船」は、
昭和39(1964)年度の読売文
学賞を受賞しています。

昭和55(1980)年8月28日死去。
月30日、高知市立文学館にて
お別れ式典が開催されました。

「寺田寅彦「茶わんの湯」100年 ふしぎいろいろ展」

レポート



寺田寅彦の科学随筆「茶わんの湯」が発表から100年になることを記念して開催した企画展「ふしぎいろいろ展」が閉幕しました。

展示室では「茶わんの湯」をはじめとする4つの隨筆に関する初版本や初公開の科学資料、隨筆「藤の実」の原稿など、貴重な資料の数々を展示しました。藤棚や金米糖などの实物展示も好評でした。

また今回、初めての試みとして、当館カルチャーサポーターの方に朗読いただいた寅彦作品の動画を作成しました。朗読は10～30分ほどと決して短いものではないのですが、椅子に腰かけてじっくりと聞く方をよく見かけました（現在朗読と作品紹介映像は、YouTubeで視聴いただけます）。団体プログラムでは、寅彦の母校である



実験イベント(渦を作る実験)



団体プログラムの様子



展示のようす



藤の実の展示

江ノ口小学校の皆さんのが来館くださり、その後避難訓練を行うなど、当館で初めてとなる意義深い試みを行いました。関連企画のうち、松下貢先生の記念講演会「自然を見る新しい目—寺田寅彦の科学の現代性」では、複雑系科学についてたくさんの方の写真を交えて説明いただきました。初めは難しそうとおしゃつっていた方が、最後には「あれも複雑系」と積極的に発言されていて、皆が一体となって面白がっていたことが心に残っています。また高木隆司先生の記念講演会「寺田寅彦とレオナルド・ダヴィンチー形の科学のキー・パーソン」では、雪の結晶ワークショットなどを交えて形の不思議に迫りました。

さらに高知みらい科学館の岡田直樹学芸員をお呼びして行った実験イベントは、ペットボトルで雲や渦を作るま

さに寅彦の言う形の科学を実践する実験で、手元に見える雲や虹に子どもたちが熱中していました。おなしキャラバンや展示解説も、子どもから大人まで幅広い参加がありました。

寺田寅彦の研究成果や隨筆が今も親しまれるのは、多くの人と違うものの見方をしており、今なお新しい発見があるからでしょう。皆さんも科学者や作家のような気持ちになって自然を見ると、つまらないと思っていた日常生活が、まったく違う、きらきら輝くような新鮮さで満ちるかもしれません。

企画展は終了しましたが、今後も皆さんの中での寅彦の隨筆が毎日をワクワクして過ごすためのヒントになれば嬉しく思います。

(学芸課／川島禎子)

常設展 中めがね

シリーズで変わる
常設展をご紹介！

記念年やテーマに沿って展示が変わる当館名物「変わる常設展」。
（自由民権運動と文学）コーナーの中江兆民を植木枝盛に入れ替えました。

植木枝盛

植木枝盛は安政4（1857）年、土佐郡井口村（現高知市）に藩祐筆・植木弁七直枝の子として出生。藩校致道館を経て東京の海南私学に入学するも、数ヶ月で退学。以後は独学自習で諸文献に学び、中でも福沢諭吉の『学問のすゝめ』や『文明論之概略』等から自由・平等・独立の啓蒙精神を吸収しました。

枝盛は数え年18歳の頃、板垣退助の演説に感激して政治を志し、再上京。2年間の遊学時代に投書家として頭角を現します。明治10年2月の西南戦争勃発後、言論による民権運動を決意した板垣に従つて帰高。立志社に入社し、自由民権運動の理論的指導者として大きな業績を残しました。

枝盛の文学的作品として「民権自由数え歌」や「自由詞林」の民権詩歌があります。

西洋のポエトリイに倣つた新たな詩型の模索として、明治15年に日本近代詩のさきがけとなる矢田部良吉らの『新体詩抄』が出版されて以降、新体詩が続々と世に現れ、枝盛の『自由詞林』もその潮流の中で生



枝盛は今年で没後130年。展示では、人間の平等や女性解放を説き、自由民権運動や社会改良運動に生涯を捧げた枝盛の短い生涯を、自筆の書や愛用品など貴重な実物資料を交えてご紹介しています。ぜひご覧ください。

詩集の冒頭では、米国とスイスの獨立を讃えた詩が七五調で高らかに謳われ、中盤の「自由歌（其一）」では、西洋における絶対君主制との戦いの歴史と、帝国主義が席捲するアジアの惨状とを対比させ、「自由歌（其二）」では「吾の願は 自由なり／吾の願は 自由なり」と自由への希求が繰り返し謳われています。

『自由詞林』が出た明治20年秋は、自由党解党や激化事件への政府の厳しい弾圧により沈滞していた民権運動が、党派を超えた大同団結運動や三大事件建白運動などで再び活発化した時期です。民権運動最後の高まりに呼応するかのように出版されたこの詩集には、自由を求める枝盛の叫びが込められています。

されました。

高知市中心部の文化施設が連携し、「文化」をキーワードに開催する「お城下文化の日」。今年も11月20日（日）に開催しました！

学芸課より よ城下 文化の日 レポート

高知市中心部の文化施設が連携し、「文化」をキーワードに開催する「お城下文化の日」。今年も11月20日（日）に開催しました！

学芸課より よ城下 文化の日 レポート

■文学さんぽ
文学の目線で街歩きをする「文学さんぽ」。心配していた雨も降らず、参加者の皆さんから「こんな所があつたとは知らなかつた！」等の嬉しい感想をお寄せいただきました。

土佐民話の紙しばい

文学館カルチャーサポーターの皆さんによる紙芝居公演も開催。熟練された語りに子どもから大人まで時間を忘れて聞き入っていました。

このほか、開館25周年を記念して来館者の皆様にささやかなプレゼントもご用意。さまざまなアプローチで文学の魅力をお伝えできた貴重な一日となりました。

この日は「寺田寅彦「茶わんの湯」100年ふしぎいろいろ展」の最終日にあたり、寅彦にちなんだ貴重な資料を公開する「一日限定展示」や「万華鏡づくり」、入館者へのプレゼント、高知城を中心に文学の視点でまち歩きをする「文学さんぽ」や「土佐民話の紙芝居実演」など、多彩な催しで展覧会の最終日を盛り上げました。

一日限定展示

夏目漱石門下の東新に宛てた寅彦の書簡や、高浜虚子の短冊など初公開の貴重な資料を展示。「ふしぎいろいろ展」と併せてじっくり鑑賞するお客様が多くいらっしゃいました。

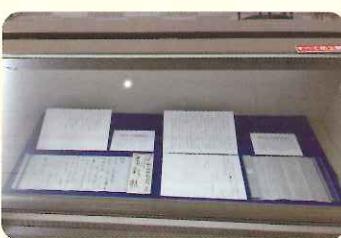
いました。

あなただけの小宇宙 「万華鏡」をつくろう！

昨年はコロナ対策により実施できませんでしたが、今年は寺田寅彦著「万華鏡」にちなんだワクショップを開催することが出 来、開始時間とともに満席になる大盛況の催しとなりました。



大盛況の万華鏡づくり



貴重な資料を1日限定展示



土佐民話の紙芝居公演



文学さんぽでは拓本にもチャレンジ！

（学芸課／福富陽子）

みんなおいでよ！

（学芸課／岡本美和）

京大東洋学の泰斗

—中国史・文学の碩学—小島祐馬の帰農

是

上林曉 隨筆草稿
大熊伊禰子氏寄贈



左手で書いた隨筆原稿

寄贈資料から

資料受贈報告

作品の執筆時期は、1968（昭和43）年から1969（昭和44）年であり、いざれの作品も、上林曉全集15巻に収録されています。

なお、文学館では、2017（平成29）年に、上林の孫になる大熊平城氏から3点の草稿も寄贈いただいています。

資料は、2022（令和4）年12月1日（木）から開催する「生誕120年記念上林曉展」で紹介しますので、是非、ご覧ください。

明治十四年十二月、祐馬は吾川郡弘岡上ノ村（現高知市）の農家に生まれた。県立第一中学校（現追手前高）、熊本第五高等学校を経て、京都帝国大学法学部を出て中国に渡った。その後、同文学部に再入学。京大文学部教授、フランスに留学、文学博士・同文学部長・京都大学人文科学研究所初代所長を務めた。

昭和十六年六十一歳で定年退官。狩野直喜、内藤湖南、桑原隠蔵、小川琢治らと京大東洋学研究ですぐれた学風を構築。老父を故郷に残すに忍びず、膨大な書籍と共に、弘岡に帰郷した。

天下の学者を田園に放置するのは惜しいと、高知の漢籍を愛する当時の人々は、月に一回荒倉峠を越えて小島邸に参集。「孟子、春秋左伝、易經、老子、莊子」などの講義を受けに通つた。第二次吉田内閣、組閣の頃、吉田茂は、祐馬に文部大臣をやる気がないか、次官（秘書とも言う）に、打診されたといふ。吉田は、学者好きで有名であったが、若き頃、天津、奉天などの領事をやり、當時から祐馬の学識、人格を知っていたのであ

りう。また祐馬の京大時代、総長の後継者選定などに示した政治力も熟知していたのではないか。使者は東京からはるばる弘岡に来て、広い田圃の畦道に麦藁帽子を冠つて坐している老人を見つけた。「祐馬先生ですか?」「そうじや」首相の意向を伝えると、「吉田に言うてくれ。わしはそんなことをしておるわけにはいかん。今、麦作りに忙しい」と言つたそうだ。使者は首を振りながら、「吉田も吉田だ、こんな老人に文部大臣とは」と言いながら帰京したと言われる。私は若い頃、高知新聞社の受け付けの近くで、机を置いて執務したが、常任顧問の中島及（二村）翁を時々、祐馬が訪ねて来た。「やあやあご無沙汰じや。寛恕」と言ひながら、碩学両翁がロビーのソファに腰を沈めて、「呵呵大笑」して、いる姿を見たとき、現代の寒山、拾得とは真にこれだなと思つたことがある。

著書「古代支那研究」「中国革命思想」「中國共産党」「中江兆民」など、経済学者、河上肇との交友は有名。



高知市春野町弘岡上、小島祐馬が帰郷した小島邸。
ここで“晴耕雨読”を楽しんだ

上林曉 1902年～1980年
（昭和55年）は、
高知県幡多郡田ノ口村（現黒潮町）出
身の私小説作家です。本名、徳廣巖城。
今回、寄贈された資料は、上林曉が左手で書いた随筆の草稿10作品です。

上林曉（1902年～1980年）は、上林曉の長女であり、著作権継承者です。長年、教職に従事され、今年で91歳になられました。

草稿は、昨年、102歳で亡くなられた上林曉の五番目の妹、徳廣睦子氏が大切に所蔵していたものです。睦子氏は、特に晩年の18年間、上林の介護をしながら、作家としての彼を支え続けてきた人物です。遺品を整理していた伊禰子氏が、遺品の中から見つけました。

上林は、1962（昭和37）年に、脳溢血を再発し、口、右手、下半身が不随となりました。翌年には、睦子氏による口述筆記「白い屋形船」を発表しますが、1966（昭和41）年には、左手による筆記の練習を始めています。

これらは、上林が不自由な身体を押して執筆した貴重な資料です。

上林は、左手で書いた原稿について

は「全て焼くように」とご家族に話していたそうで、左手で書かれた草稿は、ほとんど現存していません。

- ▼前田山紀作「さち子句集野の花のように」
前田幸子著 前田由紀枝刊
- ▼北原初枝「まつことめでたい96歳」
私の昭和平成、令和覚え書
- ▼坪井忠二編「岩波书店刊」他
松崎淳子著 松崎淳子先生の本を出版する会刊
- ▼窮理舎・窮理舍刊
伊崎修通編 穷理舍刊

第25回

児童生徒文学作品朗読コンクール／レポート



児童生徒文学作品朗読コンクール



当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、児童生徒文学作品朗読コンクールを開催しています。今年は25回となります。

今回は、県内の小中学校30校から85名の参加申し込みがありました。やむを得ない事情で残念ながら出場を辞退した方もいましたが、参加者の皆さんの協力のおかげで3地区4日間にわたって開催された地区審査を無事に終えることができました。そして厳正なる審査の結果、小学生14名、中学生7名、合計21名の県審査出場が決定しました。



中学生の部



小学生の部

地区審査では、さまざまな朗読を聴かせてもらいましたが、どの朗読も大変素晴らしいです。小学生低学年の子どもたちは元気いっぱいでこちらの心も温かくなっています。また、朗読するところを楽しむ、より深く作品世界を理解できることは、読み手にも大きな喜びをもたらします。

また、県審査は11月13日、田島征彦先生の記念講演会は残念ながら中止となりましたが、本選は滞りなく行われました。緊張もあつたと思いますが、21名すべての出場者が地区審査を上回る朗読を披露し、自分の力を出し切った素晴らしい内容でした。非常に高いレベルで得点も僅差であり、審査委員の先生も

りましたし、高校になると細やかな感情と正確な地の文の朗読が明確に区別され、臨場感たっぷりの読みを披露してくれました。中学生ともなると本当に大人顔負けで、また今年は特に郡部の中学生の朗読が際立きました。いずれも本人の努力と、指導されている先生のお力添えの賜物でしょう。一人一人が夏休みの間にきちんと努力をしたことは、朗読を聴けばよくわかりました。

また今年は特に郡部の中学生の朗読が際立きました。いずれも本人の努力と、指導されている先生のお力添えの賜物でしょう。一人一人が夏休みの間にきちんと努力をしたことは、朗読を聴けばよくわかりました。

今回、参加してくれたすべての児童生徒の皆さんをはじめ、指導した学校の先生、見守つておられた保護者の方々、関係者の皆様のご協力のおかげで、コロナ禍にも拘らず無事に朗読コンクールが開催できたことを、心より御礼申し上げます。

(学芸課／川島禎子)

審査結果は以下のとおりです。(敬称略)

金賞

香南市立野市中学校
3学年 楠瀬 優空

銅賞

土佐市立高岡第一小学校
2学年 時久 帆奈美

特別賞

高知県教育長賞
黒潮町立南郷小学校
2学年 大西 将仁

銀賞

土佐市立高岡第一小学校
5学年 時久 陽依

高知大学教育学部附属小学校
5学年 大野 友郎
高知市立義務教育学校土佐山学舎
6学年 末延 悠斗

郷土文学賞

高知大学教育学部附属中学校
1学年 岡部 麗桜

土佐中学校
2学年 梶 春佳

高知市立城西中学校
3学年 戸梶 紫乃

※上記のほか、11名の方が入賞されました。

す。また、真剣に朗読に取り組む姿は聞き手の心を震わせ、作品の深い理解に基づく気持ちのこもった声は、感動を与えてくれます。

来年
2月開幕!

柴田ケイコ展

～チャカボコカーニバル～

会期 令和5(2023)年2月4日(土)～3月26日(日)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日 会期中無休

場所 高知県立文学館 2階企画展示室
観覧料 500円(常設展含む)高校生以下無料

平成28(2016)年に『めがねこ』で絵本作家としてデビュー以来、小さな子どもから大人まで魅了し続けているイラストレーター・絵本作家の柴田ケイコさん。いよいよ来年2月に当館オリジナルの展覧会を開催します。

本展では柴田さんに全面的にご協力いただき、大人気絵本の原画展示のほか、創作のヒミツにせまるQ&Aコーナー、本展初公開のコメシブアート作品など、アッと驚いて思わずウフフと笑ってしまうユニークな展示内容を予定。

各地で開催するたび満員御礼となるサイン会や、バレンタインデー・ホワイトデーにちなんだ関連イベントも計画中です。

「大人にも子どもにも楽しんでもらいたい」と願い作品を生み出し続ける柴田ケイコさんの愛とユーモアあふれる世界をお楽しみください。展覧会の様子は次号で詳しくご報告します。

(学芸課／福富陽子)



ショッピング より

残暑厳しい中開幕した「ふしきいろいろ展」秋が深まり藤並の森が色づき始めた11月20日に無事閉幕しました。「なぜなぜ期」であろう小さなお子さまから寺田寅彦ファンの方まで幅広い年齢層のお客様にご来館頂きました。

ショッピングではコマツシンヤ氏が描くキービジュアルをデザインしたクリアファイルや金平糖がオリジナル商品として加わり、お客様にもご好評頂きました。

そして、落ち葉舞い散り冬の到来を感じるようになつた12月1日「上林暁展」が開幕しました。ショッピングでは展示に関する書籍やロングセラー商品の絵葉書を充実させています。

また、今年は倉橋三郎氏のカレンダーが入荷いたしました。倉橋三郎氏は純文学者倉橋由美子の実弟で装画・装丁家としても活躍されています。三郎氏の淡く柔らかな色彩で描かれた世界はお部屋のインテリアとしても素敵なものカレンダーです。

文学館へお越しの際は是非ミュージアムショッピングにも足をお運びください。

(総務事業課／高塚佐矢子)



館長エッセイ

違和感の正体

新型コロナウイルスという厄介な代物が上陸して、三度目の秋が過ぎた。この間、コロナ関連の話題が連日ニュースやワイドショーで取り上げられ、多くの場合、感染症の研究者の方などが「専門家」として登場する。

「専門家」—広辞苑では、「ある学問分野や事柄などを専門に研究・担当し、それに精通している人」とされている。出演なさる方々は、まさに、この定義に当てはまるのだが、いつしかこの「専門家」という紹介に、得体の知れぬ違和感を抱くようになつていて。

そんな折、「寺田寅彦『茶わんの湯』」100年「ふしきいろいろ展」の関連企画である松下貢先生(中央大学名誉教授)の記念講演を拝聴したが、そこで「複雑系」の話を伺つた時はつと気づいた。

違和感の正体は、多数の要素が複雑に絡み合つた「複雑系」の命題(コロナ対応など)に答えることができる「専門家」の存在に疑問を持つような私自身の天邪鬼な性格なのだと。

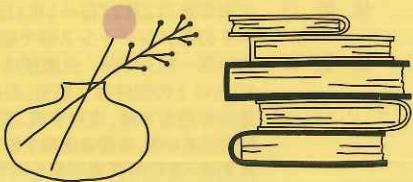
(松尾晋次)

キャラバンの当日、いざ読み聞かせが始まると、本の中の主人公たちが生き生きと動き出し、文字を目で追うだけの時とはまたちがつた世界が現れます。子供たちがだんだんとおはなしの世界に引き込まれてゆき、時には身を乗り出して聞いてくれることもあります。人の声を通すということには何か特別な作用があるようです。

キャラバンの時間は本が好きな方もそうでない方も、それぞれ楽しめると思いますので、みなさまお気軽にこどものぶんがく室までお越しください。

(学芸課／佐野仁美)

おはなし キャラバン について



高知県立文学館 カレンダー

開催中

[生誕120年記念]

上林 晓 展

Akatsuki
Kanbayashi令和4年
(2022) 12/1木～令和5年
(2023) 1/26木

■会館時間／午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) ■観覧料／400円(常設展含む)

■会場／高知県立文学館 2階 企画展示室

長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

—関連行事—

☆記念講演会

「私小説の生き方 上林曉に寄せて」

- 日 時／令和4年12月18日(日) 午後2時～午後4時
- 場 所／高知県立文学館 1階ホール
- 参加料／要当日観覧券
- 申 込／電話または文学館受付にて事前申し込み
(定員50名)

☆朗読の会

「生誕120年 上林曉」私小説を読む

- 日 時／令和4年12月17日(土)午後2時～午後4時
- 出 演／文学館カルチャーサポーター
- 場 所／高知県立文学館1Fホール
- 参加料／無料
- 申 込／不要(当日、直接会場までお越しください)

☆クイズイベント クイズを通して、上林曉やその他の作家を知ろう。

- 日 時／令和4年12月11日(日)、令和5年1月8日(日)、9日(月・祝)
各日とも午前10時～午後4時まで
- 参加料／要当日観覧券 ▪ 申 込／不要(当日、直接会場までお越しください。)

☆新春ロビーイベント

「作家が愛した音楽」

- 日 時／令和5年1月4日(水)午後2時～
- 演 奏／NPO法人こうち音の文化振興会会員
- 場 所／高知県立文学館 2階ロビー
- 参加料／要当日観覧券

☆展示解説

展覧会担当者による展示解説

- 日 時／毎週土曜日 午後1時30分～(30分程度)
- 場 所／高知県立文学館 2階企画展示室
- 参加料／要当日観覧券
- 申 込／不要(当日、直接会場までお越しください)

12月27日～1月1日は年末年始のため休館となります。

柴田ケイコ展

次回
開催！

～ちゃかぽこカーニバル～

会期 令和5(2022)年2月4日(土)～3月26日(日)

観覧料 500円(常設展含む)長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

- 新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みにご協力をお願いします。
(マスクの着用・手指のアルコール消毒・適切な距離を保つての鑑賞・イベント時のホール入場前の検温など)
- 新型コロナウイルスの感染拡大状況によって、展覧会及びイベントは内容変更または中止となる場合があります。

高知県立文学館で開催する企画展・その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、
安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利 用 案 内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。

観覧料 常設展一般370円 企画展はそれぞれ異なります。

20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳、

戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者(1名)、

高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。

(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、

茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

運営 公益財団法人 高知県文化財団

交 通 の ご 案 内

●JR高知駅から徒歩20分
(またはバス・路面電車を利用)

●バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分

●高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」

下車、徒歩20分

高 知 県 立
文 学 館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

高知県立文学館 検索

